

56

古代ギリシャ医学（AD3世紀以前）における カルキノスの症候論

堀 忠

大阪きづがわ医療福祉生活協同組合なごほり通り診療所小児科

【背景および目的】カルキノス（あるいはカルキノーマ）はヒポクラテスやガレノスが、その積極的な治療によって患者の死期を早めてしまうことを戒めるなど、治療困難で予後の不良な疾患として知られていた。carcinoma（羅）、cancer（英）、Krebs（独）などの語源とされ、またヒポクラテス文書の現代語諸訳でも、腫瘍・悪性腫瘍（大槻ら）、癌（常石）、cancer, sore（Jonesら）などと翻訳されている。しかし臓器病理学が未発達であった古代において、それがいかなる所見・病像・経過を意味する用語であったのかは必ずしも明らかでなく、先行研究にも概ねガレノスらの病因論に焦点をあてたものが多い。本研究では、現存する医学文献に残された症候学的記述を通して、当時におけるカルキノスの症候論について検討する。

【対象および方法】データベース TLG (Thesaurus Linguae Graecae) に医師 (Medicus) として収録された AD3 世紀以前の作家 31 人の全著作 (約 327 万語) について検索した。該当する時代に属するものは、偽文書や断片を含めてすべてを対象とし、この時代におけるカルキノスの症候論全般について検討することを試みた。まず karkin- の文字列を含むすべての箇所を検索し、前後の文脈から星座 (かに座)、動物 (河蟹、ザリガニなど)、製図用具などを意味していることが明らかなるものを除外した。

【結果および考察】(1) 何らかの疾患に関連する用語としてのカルキノス (動詞型、形容詞型を含む)、カルキノーマの用例は、9 人の著作に 131 回認められた (一万語あたり 0.40 回)。うち 88 回 (67%, 一万語あたり 0.38 回) はガレノス、17 回 (13%, 同 0.48 回) はヒポクラテス全集、10 回 (8%, 同 0.75 回) はディオスコリデス、7 回 (5%, 同 0.41 回) は偽ガレノスの著作中の用例であり、この四人の用例が全用例の 93% を占めている。また特定の作家において著しく使用頻度が高い傾向は認められない。上記以外にはアレタイオスに 3 回、テッサロスに 3 回、エラシストラトスに 1 回、エロティアヌスに 1 回、ソラスに 1 回 (表題のみ現存) の用例が認められた。名詞型は 106 回、うちカルキノスが 85 回、カルキノーマが 21 回。ガレノスでは 1 回を除いてカルキノス (70 回)、ディオスコリデスでは 6 回すべてがカルキノーマ、ヒポクラテス全集では 10 回がカルキノス、4 回がカルキノーマであって、著者による偏りがあったが、意味上の違いには必ずしも明らか点なかった。(2) 部位についての言及は 8 人の著者に 32 回認められた。子宮 (おそらく頸部) 13 回、乳房 8 回、(下部) 消化管 3 回、咽喉部 3 回、四肢・体表・関節各 1 回、男性器 1 回、眼窩 1 回。ディオスコリデスの処方ほとんどが用法を外用と指定しているなど、体表が治療の主たる対象とされているにもかかわらず、体表のいずれかの部位を主要な病変部とする記載は少なかった。(3) 経過としては、潰瘍、硬結、捻挫など、先行するなんらかの病変が進行・難治化した結果と考えられていた。とくにガレノスは、当時新たな病気として関心を持っていたエレファンティアシスについて 17 回にわたって言及し、原因あるいは類縁性の高い疾患として関心を示している。(4) これらの点に関して、体表深くに「隠れた kryptos」カルキノスあるいはカルキノーマという表現が 4 人の著者によって用いられていることが注目される。この語 (kryptos) がカルキノスあるいはカルキノーマ以外の疾患ないし症状を直接かつ一般的に修飾する用法は、管見の範囲では見出せず、その医学上の意味についてはさらに検討を要すると考えられる。(5) 所見としては、硬さと血管の新生を伴うこと、病変が潰瘍化した場合に癒痕化が得られないこと、低栄養や衰弱、発熱などの全身症状の進行が見られることなどが、他の皮膚病変との主要な鑑別点として強調されている。

【結論】古代医学のカルキノスには今日の悪性腫瘍の概念をそのままには適用しがたい点があり、固有の意味を含む概念として理解することが必要であると考えられる。